



第110号

令和8年8月30日発行

石坂洋次郎文学記念館

〒013-0005

秋田県横手市幸町
2-10

TEL&FAX
0182(33)5052

令和8年度石坂洋次郎文学記念館
企画展「教師 洋次郎」

会期 令和8年9月10日(木)～令和9年1月17日(日)

休館日 毎週月曜日(月曜が祝日の場合はその翌日)、祝日の翌日、

年末年始(12月29日～1月3日)。11月30日までは無休。

教員時代の石坂洋次郎にスポットをあて、この時代を掘り下げて紹介する企画展を開催します。

石坂洋次郎は1925(大正14)年6月から1938(昭和13)年11月まで、約14年間にわたって「青森県立弘前高等女学校(現・弘前中央高校)」、「秋田県立横手高等女学校(現・横手城南高校)」、「秋田県立横手中学校(現・横手高校)」で教師生活を送りました。地方での教師生活は石坂文学を育み、開花させ、人間・石坂洋次郎

を誕生させました。洋次郎は「若い私が小説ばかり読んだり書いたりせず、長いこと、教師という社会の実務についたことは、私の人生勉強にもなり、同時に小説を書く上でも着実な支えになってくれたような気がする」(「私の文学碑」)と述べています。

本展では教員時代の写真や勤務校に取材した「若い人」「何処へ」などの著作、洋次郎が編集に携わった校友会誌などを中心に展示します。このほか、教え子達が綴った「石坂先生のお



もいで」(記念館新聞掲載)の抜粋文章を展示し、生徒達の見た教師・石坂洋次郎の姿も紹介します。

また、教師体験を活かして書かれた「山と川のある町」「寒い朝」「あいつと私」などの新制高校、

大学が舞台の小説も併せて紹介します。

皆様のご来館をお待ちしています。



㊦ 横手高等女学校 昭和4年 卒業記念帖
㊦ 横手中学校作文帳 昭和8年製作

◇開催場所

石坂洋次郎文学記念館

◇開館時間

9時～16時30分

◇主催

横手市教育委員会

石坂洋次郎文学記念館施設運営協議会
石坂洋次郎文学記念館友の会

企画展準備のため、

次の3日間は臨時休館します。

9月7日(月)～9日(水)

◇お知らせ

●市内の観光施設4館、無料開放

「東北文化の日」の10月31日(土)、11月1日(日)は、かまくら館、横手公園展望台、後三年合戦金沢資料館、当館の4施設が無料で見学できます。

・・・・・・・・・・・・・・・・

◇洋次郎の随筆

横手高等女学校(現・横手城南高校)に勤務していた1927(昭和2)年2月、短編小説「海をみに行く」が『三田文学』に掲載されました。作品は反響を呼び、続けて第2作目を書くことをすすめられます。これ以降、洋次郎は雑誌や新聞に小説や随筆を発表、教師と作家の二重生活を送ることになりました。

今回は横手中学校(現・横手高校)退職後に執筆した随筆「依願退職」から、教師と作家の二重生活について書かれた箇所を紹介します。

依願退職

夜、机に向って文章を書く。——この仕事は非常に精神力を消耗させる。いわんや、その文章が、「俊才雲のごとく蠅集(いしゅう)する中央文壇の垣根をバリバリ破って確固たる地盤を築く」(この一節はある地方新聞の学芸欄の記事をそっくり借用したのだから御勘弁願いたい)体の性質のものであるから、鈍根(ひさい)菲才の私は精魂を傾けて当らねばならない。精魂が傾くと、翌日は疲労する。したがって教壇に立っても授業に清新の活気が乏しく、事務に身が入らないという結果を来すのは自然の道理である。私は、どちらかというと、小心翼翼(※2)という型の人間だから、自分が別な仕事をもっているという疚(や)ましい自覚があるので、病気でもない限りは、学校の勤めも手落ちがないようにいちおうは果した。むしろ神経質に努めたと言ってもいい。それでもやはり、一つの仕事に安心して一身を委ねている同僚たちの仕事ぶりとは大分違うことを認めない訳にはいかなかった。同僚たちはゆっくり、楽

しんで、さまざまな工夫を施しながら仕事をしているのに反して、私の仕事ぶりは、あわただしく、機械的で、小手先を利かせて上面を撫でまわしているような気がしてならなかった。

しかしまた、点を甘くして私の立場を考察すると、私が、教職以外に、人間の生活を研究活写する小説の仕事にも耽(なまぐさ)っていたことは、「獵師山を見ず」とか「魚市に入って腥(なま)きを知らず」とかいふ類(たぐ)いの諺(ことわざ)に謳(うた)われているような、とかく専門家の陥りやすい旧套(※3)陳腐の弊から、私自身を護っていくれたと考えられないこともない。これは確かにそうであろう。してみると、私が小説を勉強していたということ、は、教師としての生活に、マイナスを加えたりプラスを齎(もたら)したりしていたことになる訳だが、結局のところ、マイナスの作用のほうが大きいらしい。

『石坂洋次郎文庫20われら津軽衆なり』(1967年・新潮社)より。1938年11月執筆。

※1 蠅集：一カ所に群がり集まること。

※2 小心翼翼：細かいことまで注意するさま。ひどくびくびくするさま。

※3 旧套：古い形式、物事。ありきたりな様式。